
東方煉々荘 ~ the Purgatory Virtue or Crime.

オルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方煉々荘 ～ the Purgatory Virtue
or Crime .

【Nコード】

N1459BA

【作者名】

オルト

【あらすじ】

「幻想郷は全てを受け入れるのよ。それはそれは残酷な話ですわ。」

* 東方萃夢想、八雲・紫の勝ち台詞から。

ある意味では幻想郷に受け入れられ、ある意味では拒絶された。そんな

な者達が集まる地底の世界。

そして地底の都に存在する下屋敷『煉々荘』。

覚妖怪に土蜘蛛に橋姫に釣瓶落とし果ては鬼まで巻き込んで、変わり者にも程がある住民達が送る超弩級地底戦記をとくところご覧あれ。

不幸な行き違いにより神と閻魔様と死神も巻き込まれました。

東方煉々荘（〜）始まりの朝（前書き）

どうも始めまして、絡人繰形店の方にも足を運んで下さった事のある方はどうもオルトです（　　）

このたび一話完結型ではない東方小説が書きたくなり、以前から考えていた地底メインの話、東方煉々荘の連載に踏み切りました。

なるべくテンポ良く更新していく予定なので、感想、指摘、評価、ビシバシお願いします。

東方煉々荘々始まりの朝

いずれ善悪の心理を探究し解き明かす。

そんな志を胸に男は全てを捨て去り国を出た。

いや、実際はそこまで崇高な精神を持っていたか定かではない。取り合えず言えることは、男が国という柵しがらみに心底うんざりしていた、ぐらいの物だろう。

いつまで経っても争い、諍い、戦争を続ける人間達に。

自身の身に宿った異能を使いどんな旅路であろうと『渡り歩いた』
歩き歩き歩いて歩き続けて。

男は何時の間にか……人道すらも 『渡り歩いた』この場合渡り歩いてしまったと言うべきか。

だが人であろうと何者であろうと男が進むべき道は一つ。

そして。

更に歩き続け、辿り着いた大陸の東に君臨する大国で。

「半人者の分際でこの私に善悪を説こうとする輩がいるなんてねえ、いいよ見せてみな私に、貴方の夢界を」

神を名乗る獣と出逢い。

東の最果ての島国に足を踏み入れ。

「善悪？そりやお前、女に優しくする男が善でそれ以外は悪に決まってるだろ？女はつて？無条件で正義だ、異論は認めない」

大変な変態にしか映らない漢と出逢い。

気付けば一筋だった足跡が三つに増え。

そして再び存在の道を『渡り歩いた』

それでも歩き続けた男は遂に。

真理への手掛かりに手を掛けた。

千年の時を歩いた末に漸く見つけた手掛かり、そこでもまた。

5

「人間を裁く側である我々が善悪をどう捉えるべきなのか、ですか。成る程変わり者の同僚がいるとは聞かされていましたが確かにその様ですね、いえ私の個人的な印象としては”白”ですよ、何はともあれ今日から是非曲直庁の仲間として此方こそ宜しく願います」

生涯の友と呼ぶに相応しい同僚と出逢い。

そして今……

「おっはよおおおおオオ!!!!!!」

そんな掛け声とともに頭蓋骨を木っ端微塵に粉碎される。

こんなデンジャラスな起こされ方、世界広しと言えど此処でしか体験出来ませんよ、と言うのがこの下屋敷『煉々荘』の大家の弁であった。

「いやあ今日も良い朝だねー、そうは思わないかい？開眼君」

どうも芝居染みた、悪く言うところ胡散臭い雰囲気を全身から放つ少女。薄い灰色の長髪を二つ結いに纏め。目を隠す様な、瞳の描かれた被り物を装着している、放っておくと何時の間にか消えていそうな、そんな少女。

莫奇・夢縁 はくき むえん

それがこの少女の名前であり形であった。

元は隋（現在の元の元の事だ）の国内にて祀られていた神獣、獬豸だっただが奇妙な縁により今では煉々荘の住民の一人である。

「さあ？自分はその辺りには疎いので、そもそも空の無い地底に良い朝も悪い朝もないのでは？」

「チツチツチイ！！分かってないなあ。空が無いからこそ、その日の目覚めを大切にすべきなのだよ」

人差し指を左右に振り、甘いと言わんばかりに口元を弓形に反らす夢縁。

「その大切な目覚めをあのような形で彩るのは如何なものかと思いますけどね、自分としては」

「相変わらず開眼君は頭が硬い！！」

「貴女の頭がふやけ過ぎなんですよ」

それに己の頭の硬さぐらいの自分が一番良く分かっている。

だが、それもまた彼。

ふどついでん
不動院・E・かいげん
開眼

を表す要素の一つなのだから。

「ところでデュランはどうしたのですか？遅寝早起寝不足が信条の彼にしては些か起床が遅すぎる」

彼がもう一人の住民の様子を尋ねると。

「んにゃ、今頃悪夢の中にでも居るんじゃない？乙女の着替えを覗こうとした罰として」

しれっと答えた夢縁だが彼女の有する【悪夢を操る程度の能力】を込みで考えると全く洒落になっていない。

「あれはどう見ても事故だったでしょうに、それに何ですか乙女っ

て」

「心構え的な意味でだよ」

サイですか、それだけ言い残すと開眼は部屋を後にし今頃魔されているであろう漢の元へ向かうのであった。

「……む、これは酷い」

白髪の中に一房だけ混じっている黒髪を片手で弄びながら思わず、と言った調子の声が開眼の口から漏れる。

「あががががががが」

視線の先には、頭を両手で抱えながら白眼を剥いてピクピクと痙攣する金髪の漢。

成る程、確かに酷い。

とは言えいつ迄もこんな所で寝ていられても困る訳であって。

……今日は大事な日だと言つのに、全く夢縁も悪戯は程々にしてくれませんか

「さて、少し痛みを感じるかもしれませんが、まあデュランですから大丈夫でしょうー錫杖を我が手に」

シヤラン、という音と共に開眼の手へ収まったのは一本の錫杖。

頭部の輪形に菱形の遊環、その数は左右六個づつの計十二個。

開眼はトントン、と床を二度叩き狙いを定める。

「怠惰……として扱うには抵抗ありますねこれは」

そう言いつつも錫杖を振りかざすと。

「断・罪」

「ぐはああああ!!」

容赦なさげに漢の顔面へと叩きつけた。

目が覚めたのだろう余りの痛みにのた打ち回る漢。

ソーデュラン・カーマイン

の顔面は読んで字の如く潰されていた。夢縁が開眼の悪夢を操った時とは違う、これは現実である。

だが

「おお、開眼か助かったぞ。まったく夢縁の奴はまだ起こってるのか」

次の瞬間には傷一つ無い姿、金髪紅眼の端整な顔立ちがそこにあった。

「やはり見事な物ですね、染みの一つも残さないとは」

「と言っても割と方向性の偏った能力なのだがな」

しかしそれでも【血肉を操る程度の能力】厄介者に曲者に嫌われ者が勢揃いの地底で確実にトップクラスの能力である事には変わりはない。

と言ってもソーデュラン自身は余りの自身の能力が好きではないらしいが、西欧の実家と縁を切って日本に定住し数百年、もはや完全に此方の住民だ。

ともあれ

不動院・E・開眼

莫奇・夢縁

ソーデュラン・カーマイン

この三名の住人が住まう下屋敷、『煉々荘』の朝はこうして始まりを迎えるのであった。

東方煉々荘々々始まりの朝（後書き）

如何だったでしょうか東方煉々荘第一話、え？短過ぎて判断出来んわって？

まあ一話2500字程度が目安なので、と言っても長い時は長くなると思います。

それでは第二話でお会いしましょう）（

東方煉々荘々地靈殿にご挨拶・前編(前書き)

第二話です) (

この調子でドンドン行きたいと思います。

東方煉々荘――地霊殿にご挨拶・前編

開眼らが住まう下屋敷『煉々荘』は二階建ての町屋造りとなっており、一階は『座敷』『土間』『厠』『客間』そして二階はそれぞれの『寝室』『書庫』という間取りとなっている。

彼等が現在集合しているのは大体二十畳程度の広さを持った『座敷』、三人が集まる際にはこの部屋を使うのが原則だ。

「……さて、今から御二人方に伝える事柄は言うまでもありません」
「なら別にイイよー言わなくて、私達は勝手にやるからさあ地底つてのがどんな場所なのか興味深いしね」

「それやらせると此処が減びかねないからこうして話をしているんですよ」

出鼻を挫いて揚げ足をとってくる夢縁の言葉を取り敢えず封殺しておく開眼、本当に彼女が何をしでかすか分かったモノではない。

「して開眼、今日の今後の予定について説明してくれ。俺としても個人的に色々と考えが在るからな」

「そうですねデュラン、夢縁も今は自分の話に耳を傾けて下さい」

……こんな事なら轉移した直後、昨晚の内に話を通しておくべきでしたね

後悔先に立たず、である。

「……では気を取り直して、この我々の住居たる『煉々荘』を地底に転移させ半日、空間の転移による不具合なども見られない様ですし、まあそろそろこの場を離れても特に問題は無いかと思われます」
淡々の告げていく開眼。

建物ごと転移させた為、念には念を入れ此処を一切離れない事にしていたのだが、何事を起こらない以上地底で暮らすに当たり幾つか済ましておく事が在る。

その中の一つが……

「『地霊殿』？此処の元締か何かか？」

「元締ってデュラン、此処は賭博場ではありませんよ」

「考え様によつてはそれ以上に質が悪い訳だけどねえ？」

夢縁の言葉は当たらずと雖も遠とからず、と言えよう。

地底とは大地の底辺。

其処にいる者達は底にいる者達なのだから。

此処に居る様な奴は地上で封じられ墮とされた者か、忌み嫌われた力を持ったが為自主的に墮ちてきた者か、そのどちらかだ。

最も極一部は例外であり、此処の住民はその極一部の含まれる訳であるが。

「私も実際に対峙した経験はないのですが……この地を治める『覚
妖怪の姉妹が住まう殿、との事です。一度挨拶をしに向うのが礼儀
と言つものでしょう」

「へえ〜覚妖怪かあ、流石は地底初っ端から大物が出てくるねえ」

「相手の心を読む妖怪……か。確かに此処を治めるには持つてこい
の能力だな」

「ええまあ、地底に居る^{トラウマ}心に傷を負っている、が成り立つ以上は
絶大な力を発揮するでしょうから」

何はともあれ。

「それでは行きましょう。

『覚』の住まいし地底の殿へ」

向うは地霊殿。

地底の底辺である。

「おおー何と云うか大興の都を思い出すねえ」

「……そうなのか？開眼。俺は行った事が無いからな騒がしさで言

えは奈良や京の都に劣っていないが」

「そうですね、建築様式は何処となく大陸様に近いものを感じます。私見ですが彼方から渡って来た妖怪に建築技術に通ずる知識を持つ者がいたのでしょうか」

地底の都の第一印象を述べよ、と問われれば十中八九帰ってくるのは「騒がしい」と言う筈であろう。

と言うか三人の第一印象は既にその様に決められつつあった。

先程、開眼の口から建築様式は大陸風である。との意見が出ていたがこの地底の都『旧都』其の物の造りはかの平城京や平安京に酷似している。

元よりそれらの首都は長安の都を倣う物なので、彼等の意見は概ね合っている。

旧都中央を突き抜ける様に横幅のある大路が奔り、その先に地霊殿が建っている。と開眼は聞かされている。

しかし実際にこうして見てみると。

「何ともまあ分かりやすい造りになっていますね」

「そうだな、あの先の方に見える黒い影が地霊殿で間違いないだろう」

開眼の呟きにソーデュランから同意の声が上がる。

「でもさ開眼君、私が思うにコレは明らかに誘ってるよねえ？」
敵を。

自らに盾突こうとする連中を。夢縁が言っているのはその事だろう。

確かにあの立地条件は攻め易い、攻め易いにも程がある。

これ程の遠距離であっても遮蔽物の一つも無いと言う事はだ、人間ならまだしも妖怪からして見れば隙だらけの唯的の唯的と言えようか。

「ふむ、其れ等を含め全てを纏め治めるだけの力が在る、と言う訳ですか、いやはや其れは何とも……」

……頼もしい限りでは無いですが。

自分と同じか、それ以上に堅物な彼の同僚が永年に渡ってこの地の管理を任せていたのにも納得がいく。

「そういえば、手土産の一つも無しに挨拶と言うのは少々非常識でしたかね」

「ん、別に良いんじゃないの？これって此処に住む為の通過儀礼みたいなモノなんだし」

「俺は開眼に任せるよ」

何とも投げやりな返事であるが、まあなる様になるだろう。

しかし、手土産と言っても覚妖怪が何を好むのか、開眼は全く知らない。

……こんな事なら彼女に話を聞いておくべきでしたね。

今のとなつては後の祭りである。

仕方がないので適当に尋ねて見ようか、と道端にこれでもかと建ち並ぶ屋台の中から比較的”器”が大きく中身の方も清純な者を選ぶ。

……うん、この方にしましょう。

「もし、店主殿少々お尋ねしたい事があるのですが」

頬の傷跡が目立つ中級妖怪が客引きを辞めてこちらを振り向く。

「ん？お前えさん等見た事ねえ顔だな、新入りかあ？！」

「ええまあ、そんなところです」

どうやら力量差の分かる男であつたらしく、変に絡まれる事もない。

「それで、俺に何の用だ？」

「地霊殿に住まう覚妖怪がどの様な物を好むのかを知りたいのです、これから此処に住む者として挨拶に向かおうかと思ひまして。」

食料、娯楽品、芸術品、種は問いませんが、貴方も地底暮らしが長い様ですし御存知ありませんか？」

すると店主は一瞬惚けた顔をし。

……何かおかしな事を言つたのでしょうか？

次の瞬間。

「はっはっはっ！…こいつぁ面白い。こちららあの姉妹と極力関わらねえ様にして毎日過ごしてるってのに態々挨拶しに行く奴が居るとはなあ！！」

爆笑し始める店主、そして呆気に取られた開眼が口を開く前に。

「こりゃ久し振りに骨のある新入りが来たみてえだ、しかし手土産……か、おい旦那ちよいと耳を貸しな」

「旦那って、いやまあ良いでしょう」

「覚妖怪が好きな物なんざ知ってる奴はあの殿の中にいる動物ぐれえのもんだ、それにだな……彼奴等は心を読む。」

……つまり手土産なんぞで気を惹いても無駄なんだよ、全部筒抜けになっちまうからな」

なるほど、と納得した様子の開眼。

道理でこの店主が笑い始めるはずだ、確かにそれならば手土産を持つて行く必要はあるまい。

「それは確かに……理に当たる考えです、感謝しますよ店主殿」

「それなら一つ買ってくかあ？人間の二の腕の燻製だぞ」

「ああ、自分人喰いでは……」

無いので、と答えようとする。

「生のは無いのか？」

「おっとそっちの兄ちゃんは生派だったか、ほらよ生はこっちだ」

「何をさらりと買い取ってるんですかデュラン」

「いいだろう？ 偶にはこっ言つのも」

さも当然な顔で人間の生肉を咀嚼するデュランに思わず溜息を漏らす開眼。

……む、そう言えば

「時に店主、これらの人肉は一体何処から？」

基本的に地底から妖怪達が外に出る事は無い、と言つより出る事が出来ない。

地底と地上を唯一繋ぐ洞窟は術によって封印されており。そこを通るには覚妖怪の許可がいるし、許可が出た前例どころか申請があった事すら無い。

なので人肉を手に入れる方法などないのだが……

「ああ、こりゃ地上の賢者殿が仕入れてくれたモンだ」

……何だ隙間でしたか。

確かに彼女であればこの程度の事は容易いだろう。

もつとも、彼の相方である彼女の存在もある為、余りスキマ妖怪との仲は良くないのだが。

「最後まで為になる話をありがとうございました、又いずれ」

「おう、いつでも来な」

……”器”に見合う人物で良かった、地底の連中が皆こうなら良いのですがね。

生憎ながらそうではない、故に開眼は此処へ来たのだから。

……そろそろ向かうとしますか。

怨霊すら恐ると言う地獄の殿へ。

二人に声を掛けようと振り返り、そして。

「……………デュラン」

「何だ？」

妙に大人しいと思っていたのだが……

「夢縁は……………夢縁は何処ですか？」

「……………あ」

どうやら、彼等が屋台の店主の話に耳を傾けている間にトンスラしてしまったらしい。

……あ、あの大馬鹿はっ！！

少しだけ、仕事をしない部下にいつもガミガミ怒っている同僚の心が分かった気がした開眼であった。

東方煉々荘々地霊殿にご挨拶・前編（後書き）

第二話でした（ ）

タイトル詐欺ですかね？これは。

地霊殿に入る事すら出来なかったorz加えて一人どっか行きま
したし。

明日こそ地霊殿へ！！

東方煉々荘々地霊殿にご挨拶・中編

「全く、何処に消えたのやらあの大馬鹿は」

開眼の際を突いて逃亡してしまった夢縁。

彼女の捜索の為デュランと二手に分かれ地底の都、通称『旧都』の街に繰り出した開眼だったのだが。

……これと言った痕跡も手掛かりも無し、ですか。当然ですね。

あの夢縁がそんなへまをしでかすとは思えない。

となれば後は彼女が動き出すのを待つしかない、生粋の騒動トラブルの種メーカーである夢縁の事だ、きっと派手にドンパチやらかしてくれるだろう。

だが。

……それからでは遅いのですが。

開眼としては、地霊殿の覚姉妹へ挨拶をしていない状態、と言うかさして名の売れていない現状で騒ぎを起こされるのは好ましくない。

夢縁の狙いは恐らく其処にある。

賢い彼女は説明されるまでもなく開眼の考えに気づいているのだろう。

……まあ別に隠していたつもりもありませんがね。

推測ではあるがデュランだって察していた筈だ。

『覚』妖怪の姉妹が地底の妖怪や怨霊に恐れられているのは地底の常識。

そんな中、正面堂々と地霊殿に”挨拶”に向かえばどうなるか？

確実に注目的となり、その上で開眼の身分と移住の目的について発表する事で速やかにそして穩便に名を広める。

そんな作戦だったのだが、早くも崩れつつある。

他でもない夢縁のせいだ。

……彼女の”器”ならばある程度の距離は関係なしに発見可能、ですが流石にこれだけ数が多く密集していると……

開眼の思考が其処に至ったところで。

ピカッ！！と言う光と爆音が巻き散らかれた、距離はそう遠くない。

……手遅れでしたか、本当にあの大馬鹿は！！

いつもいつもいつだって面倒ごとを起こしてくれる。
後始末をつけるのはいつだって開眼なのに。

けれど、今は走るしかないのだ。

元凶をボコボコにする為にも。

「アーハッハッハッハッ！！！！！！イイねイイねえ！！やっぱこうでなくちゃ面白くない！！そうは思わないかね？君たちい」

「し、知らねえよ！！つーか何なんだお前は！！」

「ブツ殺すぞ！？」

ケラケラと笑いながら二人の妖怪に迫る夢縁。

対する妖怪も怒声を浴びせてはいるが、とちらが下でどちらが上か審議するまでも無い。

現に先程まで彼らと共にいたもう一人の妖怪は其処に泡を吹いてぶっ倒れている。

そもそも彼等は見かけない奴がいたので面白半分で声をかけただけなのだ、いやまあ少しくらいはその美しい容姿に誘われたかもしれないが。

「こ、この糞つたれが！！」

「これでも喰らえ！！」

妖力弾、最もポピュラーであり単純に威力を出す事に特化した妖術の一種である。

ピカッ！！と言う光と共に力の暴力が夢縁の元へ殺到し。

「無駄だつてばあ、私最近自分に攻撃の当たる夢とか見ないし。全部反れてどっか行っちゃうんだよねえ。ほら、例えば貴方の方とかに」

その全てが夢縁を避け、そればかりか曲線を描きこちらに戻ってくる。

「っ?!」

しかし、何とか直前で弾を消す事に成功し。

「じゃあな、良い夢見ろよ野郎共」

小柄な、今にも折れてしまいそうな手に頭を鷲掴みにされ。

そこで、彼らの意識は途絶えてしまった。

「うんまあこんなところかな、後は……」

そう呟きながら彼女は振り向き、そこにいるどう見てもガラの悪いが妖怪連中を視界に収めたところで。

「コレを潰す頃には開眼君も追いついて来るでしょ」

一対多々の戦いに身を投じるのであった。

基本、地底において治安などと言う言葉は存在しない。

理由は単純、誰も治安維持の為に働こうだなんて考えないからだ。

好きな事を好きなだけすれば良いが、やり過ぎれば当然『覚』の知る事となりそればかりかその背後に居る閻魔を敵にまわす事となる。

だが、地底の住民は血の気の多い輩が大半であり、何より強そうな新入りがいようモノなら問答無用で大乱闘となる事は避けられない。

順って。

「見つましたよこの大馬鹿、随分と好き勝手に暴れてくれた様ですね、お陰で私の苦勞が現在進行形で倍増中ですよ」

「そりゃねえ、最初からそれが目的だし。これで騒ぎを起こさずに地位を確立させる事は不可能、こうやって暴れるのが一番さ」

ボロボロとなつた妖怪達の山に腰掛けた夢縁を誰も咎めようとは考えない。

ただ一人を除いてだが。

……辺りも囲まれているみたいですし、キャラクター観客の準備も万端と言う訳ですか

ギロリと鋭い視線を向けても涼しい顔で笑みを絶やす事のない夢縁。
これだから話を聞かない輩は嫌いなのだ。

「私はねえ開眼君、くっだらねえー事でバカみたいに悩む奴が好きなんだ、私が君にこうやって一緒にいる理由もそうさ」

「知っていますよそんな事は、今頃蒸し返す必要があるんですか？」
最初に会った際にもこんな事を言っていたが。

クツクツク、と喉で唾う夢縁はそれもそうだねえ、とだけ言つと片手を真上に上げ。

「夢を見て夢に見られて、そんな夢の中でしか恐れられない存在になってもつまらない、もっと楽しくやらなきゃ」

パチンツ！！と乾いた音が響き渡った。

「『夢界・創造』」

世界が塗り替えられ、法則が塗り替えられ、理が塗り替えられていく。

夢縁の【夢界を創造する程度の能力】によって。

この世界では彼女が法則ルールのであり絶対であり唯一神だ。

故に。

「創造主は夢を見たあ！！』何の夢を？！』敵に降り注ぐ雷イカスチの夢をお！！」

「つつ！……錫杖を我が手に！！」

彼の真上から降り注いだ雷は真実であり、錫杖で防いだ腕に残る痺れも同じく真実である。

無敵であり、夢敵。

「創造主は夢を見たあ！！』何の夢を？！』我が手に握られた劔の夢をお！！敵を押し潰す氷塊の夢をお！！」

瞬間、頭上より落ちてくる巨大な氷塊を粉碎し、更に降り下ろされた劔を間一髪で受け止める。

「今の一撃、わざと遅らせましたね？」

「何の事かなあつと！！」

夢縁は恍けたがその気になればもっと深く切り込めた筈だ。それをしなかったと言う事はつまり。

……こちらの動きを誘っている、ですか。

ここで素直に力を振るえば先の思惑は完全に崩れる事となる、しかしだ。

このまま一方的にやられ続ける事も後々の事を考えると余り良くはない。

と言っか。

「ここで応戦した時点でやるしか無かった、仕方ありません」
それならば徹底的に暴れた方がいい。

……これは、彼女に叱られても文句は言えませんね

まあ説教一つで済むのであれば安い物だ。

だから。

「御望み通りに裁きましょう、その憤怒を、その嫉妬を、その暴食を、その色欲を、その怠惰を、その強欲を、その傲慢を！！」

私の【大罪を裁く程度の能力】で、完膚無きまでに「

西欧から大陸を東へ東へと進み、東の果てにて地像菩薩の一体となり、そして閻魔となった。

非常に稀有な人生であると自覚はしている、そのせいで閻魔としての力も大分偏った物になってしまった。

だが、相手が大罪を持てばその時点で開眼の勝利は決まったに等しい、その力は相手の”存在の器”に溜められた大罪の量で決まるのだから。

「行きますよ夢縁、精々死なぬように頑張ってください」

「アッハッハ、寝言は寝て言え馬鹿野郎、ってもここが夢界なのだ

けどねえ！！」

再度、劔と錫杖がぶつかり合い火花が散る。

夢縁が炎を呼び地を裂き濁流を生み出し、その全てを開眼がねじ伏せる。

雷の龍が片手で握り潰され、焰の大虎が蹴り飛ばされる。

振るわれた錫杖の軌跡から放たれた高密度の神力弾と冷気の大鷲が互いを喰らい合う。

まるで神話のページのような闘いを地底の住民は思い思いの目で見ていた。

単に恐れる者。

新たなる強者の訪れに心踊らせる者。

興味を示さぬ者。

そして……

「双方そこまで、もう十分に暴れたのだから貴女の目的は達成されたのでしょうか？莫奇・夢縁さん」

言葉と共に一人の少女が荒れ果てた旧都の一角へと降り立った。

やや癖のある薄紫の髪に、半開きの目。フリルのついた水色の服に髪と同じ薄紫のスカートを着ており身体纏わり付く様に存在するは

『第三の眼』。

地底の管理者、地霊殿の主にして『怨霊すら恐れ怯む少女』。

「四季様から割と行動的な方と聞いていたのだけれど、どうやら事実のようね、不動院・開眼・ヤマザナドウ様？」

それが彼、不動院・E・開眼と古明地こめいじ・さとのりの最初の遭遇、であった。

東方煉々荘々地靈殿にこそ挨拶・中編（後書き）

次回こそ地靈殿です！！

東方煉々荘々地靈殿にご挨拶・後編(前書き)

眼を閉じる前のこいしちゃんを想像、もとい妄想していたらこうな
った。

東方煉々荘々地霊殿にご挨拶・後編

「名ばかり有名になってしまったせいですっかり忘れられているけれど、素敵な色付き硝子……ステンドグラス？西欧ではそう呼ぶの？」

「ええ、まさか此処に来て見る事になるとは思っても見ませんでした」

古明地・さとりに連れられやっと訪れた地霊殿。

赤と黒のタイル張りの床に眩いステンドグラスの天窓。どう見ても西洋風の殿であった。

……これで良いのでしょうか？

「良いのよ別に、元々誰も来ない場所だもの。多少見てくれが変わっていた所で気にする者など一人もいないわ……貴方は気にするのね不動院様？」

「開眼、で構いませんよさとり。立場はどうあれ私の役割を考えれば……」

「下手な上下関係など必要無い、と。分かったわ開眼」

「ご理解に感謝します」

当たり前の話だが、開眼は心を読む妖怪との対話などこれが初めてである。

慣れれば苦勞しない、と同僚の閻魔は言っていたがどうやら其れには時間がかかりそうだ。

「……別に無理をして慣れて貰う必要はないのだけれど」

「いいえ、彼女に出来て私に出来ない道理などありません」

「つまり閻魔としてのプライドが許さないと」

やっぱり苦手だ。

「……と言つか殿が西洋風ならば主も横文字を使うのですか」

何ともハイカラなものである。

彼の知り得る限りでは西欧と日本の間に交流の類は無いと言つのに。

「ソーデュランさんの思考は大半が横文字だったから、翻訳しているうちに移ってしまつたみたいね」

……え”

割と近くに交流が有つたらしい。

慌てて質問を開始する開眼の心を読み、さとりが次々と答えていく。

「いつ話をしたのか？ー先にここ（地霊殿）に来てたのよ。

今は？ー話が終わったら用事があると出て行ったわ、橋の方に行つたようね。

何か変な事？ーさあ？一つで物語が作れそうな程の口説き文句が表層心理を埋め尽くしていたけれど、その事かしら？」

ああやはりか、と頂垂れる開眼。

無類の女好きである彼が美しい容姿を持つ彼女を口説かない訳がないのだ。

「美しいって、褒められるのは嬉しいけれど、彼は紳士的だったわよ？」

さどりの言う通り、彼は紳士（変態）である。

「いや、だから」

「そうですね、彼は紳士（変態）です」

若干会話が噛み合っていない気がするが気のせいである、気にしたら負けなのだ。

「何やら難しい事を考えているみたいだけれど……」

前方を歩いていたさどりがクルリと振り返る。

「ようこそ、地霊殿へ」

地底ですら恐れられる少女は、それでも笑っていた。

地霊殿は地底の管理を行う為の事務的役割ともう一つ、重要な役割を持っている。

「これはこれは、また随分と……」

「ふふ、見事でしょう？灼熱地獄の果ての穴だもの」

中庭にポツカリと開く巨大な穴。

その先には灼熱地獄……頭に旧が付くがーが永遠と炎を燃やし尽くしている。

実はこの地霊殿、灼熱地獄跡の真上に建設されており、その蓋としての役目も背負っているのだ。

「ところでさとり、良かったのですか？自分だけで」

「構わないわ、それに彼女にその気が無いのなら連れてくる事も出来ないのだし」

「それもそうですね」

この場に欠けている少女、莫奇・夢縁だが。

又もやトonzラしてしまった。

夢界を解除し「それでは後は任せたよお開眼君！！さらばだぁー！！」と叫びながら。

本気で逃走に踏み切った彼女を捕まえるとなると、それだけで一週間が潰れてしまう。

無論そんな暇も気も無いので放置した訳なのだが。

「さてと、注意点はこれくらいかしら、何か質問は……無いみたいね。

これがお空相手だと倍近く掛かるのだけど、流石は閻魔様」

「一応事務処理も仕事の内ですから」

さとりから地底の注意点を幾つか教わっていた開眼、一通り聞き終わりその情報を軽く整理した所で……

扉の隙間からチラチラとこちらを覗く視線に気がついた。

開眼の視線が自分に向けられていると悟ったらしく引っ込んでしまったが、チラリと見えたのは黒い帽子にセミロングの銀の髪。

「一体どこを見て……あぁ少し待って頂戴」

彼らのアイコンタクト？に、座っていたさとりは立ち上がり扉に手を掛け。

「何をやっているのかしら？こいし、え？挨拶するタイミングを逃

してどうするべきか悩んでいた？、恥ずかしいから口に出さないで
って言われてもねえ」

「……お姉ちゃんは意地悪です」

そんなやり取りの末に顔を出したのは、先の特徴に黄色の服と緑の
スカート、更に青色のコードに繋がれた『第三の眼』を持つ少女。

……となると彼女が

「はい、古明地・さとの妹で古明地・こいしです、宜しくです」

どうやら他人との会話に慣れていないらしく彼女はしどろもどろに

……

「別に慣れてない訳じゃないもん、話す相手がお姉ちゃんと動物達
しかないだけで……あ」

何という自滅。

「見事に自爆したわね、こいし。」

まあ開眼も気にしていないみたいだし、ここは仕切り直しで」

顔を赤く染め今にも爆発しそうなこいしの様子に開眼は少し慌てて。

「この度、地底管理の一役を任命されました、不動院・開眼・ヤマ
ザナドゥと申します。」

こちらこそ宜しく願いますね、古明地・こいしさん」

すると、こいしは伏せ目がちになりつつも。

「よ、宜しくお願いし、ます」

「良かったわねこいし、話し相手が出来たじゃない」

「お姉ちゃんはやっぱり意地悪です」

そんな姉妹の様子を、開眼はただ微笑ましく見ていた……のだが。

「別に貴方に思われているほど子供じゃないわ」

「不動院さんだつて身に覚えがあるんじゃないんですか？」

この姉妹にはまるごとお見通しであつたらしい。

東方煉々荘々地靈殿にご挨拶・後編（後書き）

此処のさとり様は敬語じゃないんです、敬語はこいしちゃんに持つていかれました。

やっぱり閉ざす前のこいしちゃんは敬語だったのではないのかなあ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1459ba/>

東方煉々荘 ~ the Purgatory Virtue or Crime.

2012年1月6日15時50分発行